

JIM-NET 便り

2023 7月号

発行：2023年7月28日

特定非営利活動法人 JIM-NET (ジムネット)

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4丁目4番11号 内藤ビル2C
電話 03-6228-0746 メール info-jim@jim-net.net



3月16日～21日に開催した「JUSTPEACE! イラク戦争から20年・写真と絵画で迎える過去と現在、そして…」展の会場の様子です。

目次

- シリア地震被災者支援・現地視察レポート (齊藤亮平) P2
- JUSTPEACE! トークイベント (崔 麻里) P4
- The little things we can do ～私たちにできる小さなこと (ニキタ・トロプチン) P7
- 鎌田のつぶやき「イラク戦争から20年を迎えて」(鎌田實) P8



シリア地震被災者支援・ 現地視察レポート

海外事業担当・齊藤亮平

2月6日、トルコとシリア国境付近を震源地としてマグニチュード7.8の地震が発生し、両国で56,000人以上が犠牲になりました。JIM-NETでは、これまでパートナー団体としてシリア国内支援を共に行ってきたクルド赤新月社を通じて、シリア国内の被災の状況と支援のニーズ調査に努めてまいりました。

第一回目の支援(15,000USD)で、被害が大きかったアレッポ北部のシャハバ地域に住む人々に、風邪薬や喘息の薬などの医薬品及びベッドマットや枕等の生活必需品の支援を開始しました。第二回目の支援については、シャハバ地域の中でもより支援が届きにくい地域への支援が必要だと考え、支援状況や情報把握のためにイラク事務所の現地スタッフであるリームが4月下旬に現地へと赴きました。



風邪薬や喘息の薬など医薬品が圧倒的に不足してる(写真:クルド赤新月社)



広範囲にわたる被災地の多くは農村部(写真:クルド赤新月社)

クルド赤新月社と共に支援しているシャハバ地域は、アレッポの北部及び北東部の約5,000km²にもおよび、ヨーロッパに繋がる唯一の陸路であることから、多くの人々が行き交う要所となっています。また、農業に適した肥沃な土地に恵まれ、アレッポの経済の主軸を担ってきました。ジャラブラス、マンビジュ、アルバーブ、サフィーラ、アザーズといった5つの主要都市と600ほどの村からなるこの地域には、アラブ人、クルド人、チェルケス人、アルメニア人、トルクメン人、ヤジディなどの人々が暮らしています。



小麦畑やオリーブ畑が広がる

同地域では2013年から2015年にかけてイスラム戦線及びイスラム過激派組織IS(イスラム国)の支配による民間人への拷問や殺害、村の破壊が起こり、2016年と2019年にはトルコ軍からの侵攻で人々は常に危険と恐怖に晒されてきました。

現在、シャハバ地域は、クルド人勢力、シリア反体制派、トルコ軍、シリア政権のそれぞれの勢力が混在しており、複雑な状況下にあります。

今回の訪問では、クルド赤新月社の協力により、一部地域を除くシャハバ地域を訪問することができました。シリア北東部を出発した後、4日間の行程で、ラッカ～マンビジュ～コバニ～シャイフ・マクスード～サルダルキャンプ～バルハダーンキャンプ～シャハバ病院を訪問しました。この地域は既に戦争の影響で破壊されている村や建物も多く、地震による建物の倒壊との見分けがつかません。また、道中ではクルド人勢力による自治政府軍やシリア政府によるチェックポイントが数多くあり、特にアレッポ市内のシャイフ・マクスード地区への入域の際は、24箇所のチェックポイントがありました。



倒壊した建物と瓦礫の山が広がる

シャハバ地域における生活状況は極めて悪く、特に電力は5年ほど前から遮断され、1日数時間は発電機に頼っていますが、これも常にディーゼル不足のために動かないことがほとんどです。シリア北東部では、石油が1リットル当たり約70円ですが、この地域ではその10倍の価格で取引されています。同様に食料品の価格も非常に高く、医師でさえも日々の生活をしのぐことで精いっぱいだと話しています。この冬は寒さも厳しく、暖房が使えないことから住民にとっては生きることが難しい日々だったそうです。学校や病院のあまりの生活の厳しさから、シリアの他の地域に逃れたり、トルコやイラクに避難する人もいます。地震発生以前からイスラム過激派組織IS(イスラム国)やトルコの侵攻により国内避難民が多い地域でしたが、その彼らが再び避難を余儀なくされています。この地域の国内避難民は約50万人に膨れ上がっています。

シャハバ地域の村や町には保健センターがあり、そのほとんどはクルド赤新月社によって運営されています。どのセンター

も医薬品不足に悩まされており、訪問した際には、包帯すらありませんでした。救急部門だけが稼働している状況で、救急の場合はシャハバ地域で唯一の公立病院であるシャハバ病院に移送されます。貧弱な医療設備の中で、十分な治療が行えず、他の地域への移送も複雑な情勢のため簡単ではありません。患者が住んでいる場所がどの勢力の支配地域であるかによって、受けられる治療が変わる現実を目の当たりにしましたが、医師たちはできる限り人々を助けようとしていました。

シャハバ病院を訪問しましたが、シャハバ地域唯一の病院のため、多くの患者が訪れ、医師や職員の負担が大きい病院でした。整形外科、帝王切開、通常の手術が行われる外科部門と、産婦人科、小児科があり、病院は休みなく稼働しています。毎日200人以上の患者を受け入れています。

農場だった土地に作られたこの病院は、脆弱なインフラと地盤の中で今回の地震被害に遭いました。多くの壁には亀裂が入り、いくつかの部屋は使用できない状態です。また、液状化により床から水が漏れ出している部屋もあります。病院長は、担当行政やクルド赤新月に対し、出来る限りの治療を行っているが医療設備や建物の改善を強く要請し、同時に、医薬品の確保や手術後の感染症対策についても、早急な改善が必要であると話しています。



建物の至るところにびびが入ってる



液状化現象で建物の下から水が漏れ出ている

シャハバ病院の近くにあるクルド赤新月社によって運営されている2つの難民キャンプを訪問しました。

・バルハダーンキャンプ

約3,000人が暮らすこのキャンプには、アフリーンやアレppoから地震で被災した人々が逃れてきました。キャンプには保健センターがあり、周辺の村からキャンプ内にあるこちらの保健センターに運ばれてくる人もいますが、医薬品不足が深刻で、絆創膏さえもない状況でした。パンは赤新月社から、水はユニセフから提供されていますが、深刻な生活物資や水不足に直面しています。各家庭には電気がないため、住人はクルド赤新月社



水タンクは各家に設置されており、必要な際に水汲みに行く



圧倒的に医薬品が不足している保健センター



植物が生活の一部である人々の暮らし

の事務所がある部屋で携帯電話を充電(太陽発電)します。厳しい環境の中での生活ですが、テントの前の花はとてもきれいでした。この地域の人たちは植物がないと生きていけないことが垣間見えました。

・サルダムキャンプ

バルハダーンキャンプ同様、アフリーンやアレppoで被災した人たちが約4,500人住んでいます。倒壊の恐れや水漏れなど、地震で被害を受けた家に住めなくなる人々が現在も増えており、テントの増設は続いています。地震被災者のうち、約40%の人々は状況が落ち着いた後にキャンプを出ましたが、残りの約60%の人々は家の倒壊により今なおキャンプで暮らしています。バルハダーンキャンプ同様、クルド赤新月社とユニセフからの水とパンの支援以外はどこからもありません。



キャンプが足りておらず、増設が続いている



情勢不安と震災で避難の繰り返しを余儀なくされる子どもたち

全てが崩壊した地域に地震が襲い、避難民だった人々が再び避難民となりました。人々がどれほどの苦悩と抑圧の中で生きているのか、表現のしようがありません。住んでいる地域によってはなかなか支援が届きません。どの勢力の支配地域にいるか、近くに国境があるか、また、その国境はどこが管理しているかで人々が受けられる支援が変わってきますが、地震で被災した人々の苦しみは同じです。

全ての被災したシリア人が支援を受けられることを願っています。そして、その中でも特に支援が行き届かない地域に支援を届けていきたいと考えています。

シリアの地震へのご支援はこちら



～イラク戦争開戦から20年を迎えて～

3月19日に開催したチャリティトークイベント『JUSTPEACE!』。登壇者の皆さまからご発言頂いた内容の一部を抜粋、掲載いたします。中身が濃い2時間の様子をご紹介できずに残念ですが、DVDをご用意しましたので、是非、お申し込みください!



酒井啓子先生 (千葉大学教授)

イラク戦争から今年で20年という年月が経ったわけです。それと歩調を合わすかのように、ロシアのウクライナ侵攻という、いずれも大国が近隣の小国（イラクの場合は近隣でもないですけど）に対して軍事攻撃をする。そしてそれによって現状を変えようとするという、そういう試みが行われております。ウクライナに対するロシアの攻撃、侵攻に対して、国際社会はどう対応しているのか？ どうすればよいのかということ、どうも私の眼には揺らいでいるような気がします。決めかねているというか手をこまねいているというか。

こうした迷いを、どうしたらいいのか分からないという意識を見るにつれて、私はどうしても20年前のイラク戦争、あれをちゃんと反省したのだろうか？ということに常に考えます。つまり大国が（大国であってもなくてもそうですが）、ある国を攻撃して政権を変更しようという決断をしたとき、ただそれを非難するだけではなくて、その背景に何があって、何故攻撃という行動に出ざるをえなかったのか？ということも考えなきゃならない。そしてそれが何をもたらすのか？単に戦争だけの問題ではなくて、その後の後遺症とかそれによって社会が受けた傷跡とかを含めて、一体何を戦争は残すのか？ということ想像できてなきゃならない。そうした細かい配慮もなく戦争に対処してしまったことを、世界がきちんと反省していれば、



JUSTPEACE! スペシャルトーク会場にて

二度とそういった戦争を起こさないように国際社会は考えられたんじゃないだろうか、と思うんですね。そうした反省をしてこなかったことが、また繰り返すような大国による軍事攻撃というようなものを産んでいるのかなと思うと、私は常々人間はどうしてこんな風に物事を忘れてしまうんだろうと思ってしまいます。



湯川れい子さん (音楽評論家)

地球が始まって、人類の歴史が記録されるようになって、少なくとも1万3千年前から人間は、集団で武器を作って殺しあっていたということが分かっています。そんな昔から戦争しながら地球上で生きている動物なんて、すべての生命の中で人間だけです。しかも同じ人類が産んだ子供を殺しあっている、それも集団で。それを国際犯罪としていないんです。プーチンに国際逮捕状が出たというけど、私は全人類に逮捕状が出てても良いと思っています。

こうやって見えても、女性のリーダーというのはどこにもいませんね。今回の戦争もそうですね。いつもゼレンスキーさんとかバイデンさんとかプーチンさんとかテレビに出てくる顔を見ると、それぞれに正義を語っているんですけど。でも、例えばイギリスにしてもイタリアにしてもフランスにしても、あの戦争が始まった時に、どうして止めてくれと、それぞれの国のリーダーがウクライナでもロシアでも駆け付けなかったのかと。何故そこでそれぞれの国が武器を提供したのか？何故武器を提供するのか？何が何でも自分の国土を守ると言っているゼレンスキーさんは、正しいとは思いますが、でも本当にそれが正しいのでしょうか？私は正しいとは思いません。だってそんなこと言ったらどこまでもこの戦争は終わらないじゃないですか。もっともっと死者が増えるだけじゃないですか。だとしたら、私はもっと止める方法があったはずだと思うんです。

じゃあどうするかって言ったら、誰もがとにかく何が何でも停戦になってもらわなければならないと望むことです。今やっている戦争をどう止められるか、そういうことを私たちは必死になって訴えていかなければならないと思います。…やっとなら日本もこの頃ジェンダーということを出しましたが、もしもメルケルさんが居て、もしメル

ケルさんがプーチンさんに「それは違うと思うよ」って、おっかさんとして言ってくれたら、もしかしたらウクライナの戦争はなかったのかもしれない、とまで思います。



つまり女性のリーダーというのは、少なくとも意思決定の場に、私は3分の1は居て欲しい。あれだけ大変な思いをして子供を産んで、そして夫を戦争でお互いに人間同士を殺しあうなんて場に行かせる。ただ泣いているだけの存在ではないんです。女性を過激派組織が集団的に拉致したり、女性に教育を受けさせない。それは女性に教育を受けさせたら、そういうことに対しては反対の強さを見せるからなのだと思います。それは違うということと言えるのは、ものすごく健康的で、それが違うと言えない限り、人類はこれからも戦争を止められない。同じ人間の産んだ子供を集団で殺しあって、それを恥じない。それでは治らないと思う。だからやっぱり意思決定の場に女性に少なくとも3分の1は入ってもらいたいと思うし、もう今は食料と水の奪い合いが始まっているから、そんなことで余計に武器を買って、お互いに殺しあっていたら私たちすべての命の未来は本当はないと思っています。これは私の遺言みたいなものですね。



加藤登紀子さん (歌手)

れい子さんがジェンダーということをおっしゃったんですが、やっぱりそれは非暴力ということだと思うんです。なぜ人間は、非暴力という方法をちゃんと選ばないのかっていう。…これまで、何度も何度も絶対に戦争を止めようと思った瞬間はこの世界にあったと思う。それは第二次世界大戦が終わった時ですよ。その理想主義が日本に憲法9条もたらしたと思う。あれはアメリカ人と日本人が作ったけれど、あれは一筋の光。そういう一筋の光みたいなものが、第一次世界大戦の後にもあった。1925年に国際連盟が不戦条約というのを出した。あれは一つの大きな決意で、こんな悲惨な戦争できないよっていうことで不戦条約。

…絶望感の中ではね、国による非暴力というのがある

得ない。だとしたら、やっぱり国を越えた人々の繋がりで、非暴力の活動。そして中村哲さんが言った「あらゆる暴力に裏付けされた正義が激突する」という関係が、やっぱりまだ終わらないんだけど、断固非暴力に立つ人々がいて、国境を越えて手をつなぐという人々がいて、その人たちがどんな正義よりも、どんな宗教よりも、どんな理念よりも、民主主義じゃなくて、共産主義じゃなくて、あらゆるそういうものじゃなくて、新しい地平に立って「命を守る」という原点に立って、非暴力で国を越えて、人々は手をつなぐっていう。これを広げていくんじゃないかと、今、感じ始めています。

残念ながら国が強い。暴力が強い。国が決定することによって世界が振り回されている。宇宙まで支配されようとしている。だから私たちの点と線でしかない小さな、だけどプライドを持っていたいのは「We are 99%」。つまり非暴力を求める人、生き延びようとして必死の人、決して権力を求めない人、決して戦争を求めない人は、多分生きている人間のうちの99%だと私は思います。

…今、鎌田先生もおっしゃったように、人と人が繋がって、命を助けることにまっすぐ繋がる非暴力の連帯しか、もう答えはないと思うんですね。…私が'81年に中国でコンサートした時に、オノ・ヨーコさんに手紙を書いたんです。「私は侵略者の子どもとして生まれました。だから今、中国に迎えられて、歌うとすればそれ大きな謝罪の意味のコンサートだから、感謝と謝罪。二度と戦争しない国であるという憲法9条を大事に、日本は決して戦争をしない国だということを、胸を張って言いに行きたい。それじゃなければ私は中国に行けないんです。だからヨーコさん、アメリカが戦争しない国でなければ、日本は戦争をする国なんで、どうしても手を携えていくしかない。ヨーコさんが日本人でジョンと一緒にアメリカの反戦運動してくれたことに、私は心から敬服しているし、ジョンがいなくなっても私たちは続けなければいけない」という手紙を書きました。

それを読んだヨーコさんは、「これは奇跡だ！あなたの手紙に触れただけでも奇跡だわ！」って言うてくださったんです。ニューヨークのロングアイランドで会いました。その時に「あなたのご主人は壁を壊そうとしたのね。それは本当に難しい。でもそうじゃなくて、ひとりひとりの人間の心の壁を、窓を開けることはできる。一人ずつ、全世界の一人ずつの心の窓をちゃんと開けて、そしてみんながこういう風に生きることが素晴らしいよって、光り輝く素晴

らしいことをイメージすることができれば変わるかもしれない。それが『イマジン』です」

その会話をしたことが私にとってはとても大きく、今回ウクライナ支援のアルバムの中に「イマジン」を、1曲目にレコーディングすることをヨーコさんに許諾していただいてアルバムができました。その意味で、私たち99%の人間は、決して戦争を求めている。決して暴力は求めている。素晴らしく生きることが求めている。それは国を変えることはできないかもしれない。国に暴力を捨てさせることはできるかもしれない。だから私たち99%は、平和を、非暴力を愛する人間として手をつないでいけるように頑張りましょう！



斉藤とも子さん (俳優)

思いのこもったお話しで、私たちも99%のひとり。だから「非暴力、国境はない、命を何よりも大事にする。貴方はどうしますか?ということ」が大事なんだなという気がしました。皆さんのお話しを伺っていて、いま置かれている世界の状況は明るい状況ではないのですが、今こそ色々なことに気付くチャンスというか。逆にいま、気付かないと、これから世界は無くなってしまわないかという…。もしかしたら、一番良い時期なのかもしれないと感じました。



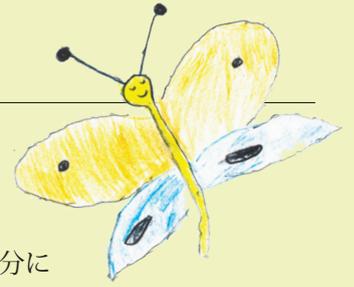
「JUSTPEACE! スペシャルトーク」
DVDのお申込みはこちら

1枚 2,000円 + 送料 250円
TEL : 03-6228-0746
e-mail: info-jim@jim-net.net

The little things we can do

～私たちにできる小さなこと

ニキタ・トロプチン (19歳・ウクライナ、ドニプロ州ポクロウ市出身)



私はウクライナから来たニキタと申します。昨年ウクライナから避難して、現在は茨城県つくば市に母と妹と一緒に住んでいます。2023年4月からは筑波学院大学で留学生として勉強しています。

2022年2月24日、ロシアによるウクライナへの本格的な侵攻が始まってから1年が経ちました。多くのウクライナ人にとって、この1年は終わりのない1日のように感じ、「戦争」という日々変動する現実の中で、時間が止まってしまったような感覚に陥っています。ウクライナ人にとって、まだ戦争が始まった2月のままです。

2023年3月17日、JIM-NETが主催するイラク戦争開戦20年イベント「Justpeace!」に参加しました。会場に行くまでは、イラク戦争やその犠牲者について何も知りませんでした。今回、多くのイラクの人々にとって、戦争が20年経っても未だに続いていることに気がつきました。残念なことに、多くのイラクの人々は長く生きることができませんでした。

会場は活気にあふれ、来場者やスタッフでいっぱいでした。壁一面には、イラクの子どもたちが描いた絵や、厳しい現実をとらえた写真などが飾られていました。私はイラク戦争後に生まれたので、イラク戦争のニュースを見ることはありませんでした。しかし、今回の展示を見て「戦争はいつどこで起きてても同じ悪夢なんだ」と思いました。展示されている作品の子どもたちの中には、すでに亡くなっている子もいると聞いて、落ち込んでしまいました。

このイベントには、筑波学院大学の野田先生からお誘いいただき、ウクライナの戦争について話をしてほしいと頼まれました。私の母と9歳の妹、そして友人のソフィアさんと彼女のお母さんも参加しました。全員が日本語を話せるわけではないので、私が通訳をし、侵略初日の出来事から話し始めました。私たちの家族はキエフにいましたが、ソフィアさんはマリウポリにいました。ソフィアさ

んはつらい経験のために、自分に起こったことを話すのが難しく、代わりにお母さんが話してくれました。ソフィアさんは空襲が鳴り続ける中、最初はシェルターに隠れ、その後は水も電気もガスも止まってしまったアパートで生活していたのです。参加者は熱心に耳を傾けていました。ある人はショックを受け、ある人は涙を隠せない様子でした。トークイベントの後は、羊ぐるぐる(羊毛フェルト)ワークショップに参加して、「幸せの青い鳥」を作り、とてもリラックス出来ました。

外国語を話すことができ、外国に住んでいるすべてのウクライナ人は、可能な限りウクライナについて話すべきだと思います。大勢の人を前にしたスピーチであれ、友人や隣人との対話であれ、戦争がまだ続いていることを分かりやすく地域社会に常に伝えていかなければなりません。これはJIM-NETがやっていることであり、私が彼らから学んだ姿です。イラク戦争が始まってから何年経ったとしても、助けを必要としている人たちはいます。そして、イラク戦争を知らなかった私と同じように、イラク戦争を知ることによって支援したいと希望する人はたくさんいると思います。このようなイベントは、人道的な活動を知るには欠かせないものであり、日本でそのようなイベントを体験できたことに感謝しています。



トーク後に参加したワークショップでの笑顔 😊

イラク戦争から20年を迎えて

鎌田實 (JIM-NET 代表)

たくさんの方々のご協力で、今回も14万個のチョコ募金が無事に終わりました。コロナ禍で、どこまで募金が集まるかヒヤヒヤしました。残り2万個というところで、お申込みの動きが止まってしまった時に、新たな応援団が入り、メディアにも取り上げられたので、最後まで走りぬくことができました。

スタートを華々しく飾ってくれたのは、毎年応援してくる方でした。動きが少し止まると関西の支援者さんから、ものすごくたくさんの数のお申込みが入りました。「僕はそんなにたくさんのチョコは食べられないから、イラクの病気の子もたちや、福島で頑張っている子どもたちにプレゼントさせてください」と温かな声が届きました。福島の障害者施設などを中心に美味しい穴花亭のチョコをプレゼントでき、たくさんの感謝の言葉をいただきました。ぐるぐると温かさが、チョコを通して周りました。

今年の3月、イラク戦争開戦から20年ということで、『JUSTPEACE! イラク戦争から20年・写真と絵画で辿る過去と現在、そして…』と題して、森住卓さんと鈴木雄介さんの写真とイラクとシリアの子どもたちが描いた絵画展を行いました。たくさんの方々、東京・神保町の文房堂ギャラリーに来ていただきました。ありがたいことです。

3月19日にはYoutubeのオンライン配信で、『JUSTPEACE! スペシャルトーク』と題して、音楽評論家の湯川れい子さん、歌手の加藤登紀子さん、千葉大学教授の酒井啓子さん、司会として俳優の斉藤とも子さんにご登壇いただきました。酒井先生からは、「20年前のイラク戦争、あれをちゃんと反省したのだろうか?」という問題提起がされました。ある国を攻撃してその国を政権交代しようとして、その背景に何があって、何故攻撃という行動に出ざるを得なかったのか?そしてそれが何をもたらしたのか?単に戦争だけの問題だけではなく、後遺症とかそれによって受けた社会の傷跡とかそういったものが、一体何を戦争は残すのか?きちっと反省し、2度とそういうことを起こさないようにしようと国際社会は考えなければいけなかった。そういう反省がなかったの



で、プーチンによるウクライナ侵攻が始まってしまった。戦争が起きてしまうと生活も心も壊れていく。戦争を止めるには女性の力が必要で、普段からもっと女性の力が必要なのに、女性が働きやすい国ランキングで、日本はワースト2位という話が出されました。働きやすいだけではなく、普段から女性の声が届きやすい社会になれば、平和が保てるのではないかという話もありました。4人の女性の強烈な話の中で、男性1人の僕は、トーク中ずっとヒリヒリたじたじしておりました。とても刺激的で面白いスペシャルトークでした。

翌日は『EDENトーク』と題して、作曲家でバイオリニストのSUGIZOさん、ファッションブランドのtenboの鶴田能史さんにご登壇いただきました。SUGIZOさんはギターにイラクの白血病の子どもたちが描いた絵をプリントして、EDENギターとして発売し、その利益の一部をJIM-NETに寄付してくれています。tenboの鶴田さんもイラクの白血病の子どもたちが描いた絵を使って、Tシャツなどをデザインしてくれて、同じく利益の一部を寄付してくれています。平和、音楽、芸術、ファッションなど盛りだくさんの内容で話されました。お陰さまで、たくさんの方々のご協力で、イラク戦争20年のイベントも無事に終わることができました。

先日、匿名の遺贈がありました。JIM-NETの活動に大変な応援をいただきました。ご家族のご理解に感謝します。有効にこの方の想いを使わせていただきたいと思います。

今後も平和と自然を守り、子どもたちが明るくいいきと生きていける社会を作るためにJIM-NETは全力を尽くしていきます。これからも応援よろしく願います。



特定非営利活動法人 JIM-NET (ジムネット)
郵便振替口座 00540-2-94945 加入者名 日本イラク医療ネット
Facebook、Twitter、Instagramもぜひご覧ください。『JIM-NETで検索』



募金・サポーター会費はこちらへ➡

